

# いきいきライフ

## ラジオ講座テキスト

毎週日曜日 6:30～ 7:00 放送  
 毎週土曜日 17:15～17:45 再放送  
 FBCラジオ 嶺北 864kHz / FM 94.6MHz  
 嶺南 FM 93.6MHz  
 パソコン・スマートフォンから radiko や FBC-i で聴くこともできます。



菜の花

### 令和七年三月 もくじ

- 三月二日放送（第四十七回）  
川柳を作りましょう……………2  
番傘はんは川柳社  
事務局長 巽 俊一
- 三月九日放送（第四十八回）  
こどもファーストの福井に……………4  
福井県こども応援プロジェクト  
武原 智美
- 三月十六日放送（第四十九回）  
人と、地域と、能作……………6  
株式会社能作  
代表取締役会長 能作 克治
- 三月二十三日放送（第五十回）  
まちの課題を学生の発想で考える……………8  
関西大学環境都市工学部  
教授 北 詰 恵一
- 三月三十日放送（第五十一回）  
ボルカライズ全国区への道……………10  
日本ボルカライズ協会  
会長 波多野 翼
- 感想文のコーナー……………13
- 文芸欄……………15

■三月二日放送(第四十七回)

川柳を作りましょう

番傘ばんは川柳社 事務局長 巽 俊一

川柳とは

人間の喜怒哀楽を詠んだ心のこぼれ。

その気持ち、感情を五七五でリズムよく表現したものが

川柳。

川柳で大切なものは、リズム

そのためには五七五の定型を守ることに。

「指五本五七五のためにある」 大木俊秀

上五・中七・下五

最初の五音節を上五、中の七音節を中七、下の五音節を下五と言います。



音数の数え方

五十音は一音 クラス会(五音)

「ん」は一音 新幹線(六音)

「」は一音 ビール(三音)

「っ」は一音 コップ(三音)

「しゃ、しゅ、しょ」は一音 主人(三音)

報告句・説明句にならないように

「日本で富士は一番高い山」

「雨上がり雲が向こうへ走り出す」

作者の気持ちや、句に入っていない。ただ説明しているだけ。

言葉を詰め込み過ぎない

「米寿の日義母と有馬の宿へバス」

「山ノ湯へ母の米寿を祝う旅」と添削すると、すっきりする。

川柳は省略の文芸

「ぬぎすててうちが一番よいという」 岸本水府

これだけで、作者の気持ちがよくわかる。

近詠

最近の日常生活の句・雑詠とも言つ。自由に作句したもの。

「趣味というサブリが私強くする」 巽 俊一

## 題詠

宿題(お題・課題)を川柳にしたもの。

川柳の大会や句会、誌上大会などは、この方式

『てにおは辞典』(三省堂)が役に立つ。

## 「句」(字結び)とは

通常の足の他に、満足とか不足とか、足の付いた句であれば良いという意味。漢字一文字の場合、字結びが出ることもある。

## 宿題を詠み込む場合の句

宿題「愛」

「ひとすじの糸から女愛を編む」 津田一江

## 宿題を詠み込まない場合の句

「虹だよと庭であなたの声がする」 岡本 恵

宿題が出た場合、詠み込んでも、詠み込まなくても良い。

一般的に関西方面に読み込み、関東方面に詠み込まない句が多い。

## 大木俊秀先生が言う良い川柳とは

ズバリ斬る、ホロリ泣かせる、チクリ刺す、ニンマリ笑つ、ポンと膝打つものが多い。

現代川柳では更に、情景が浮かび、ドラマ性があるものが良いと言われている。

推敲は大事な作業

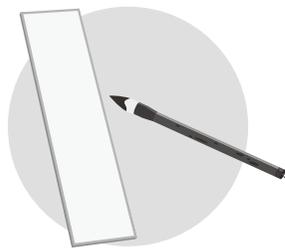
誤字脱字は命取り

## 参考文献

『楽しい川柳』 番傘川柳本社編

『俊秀流 川柳入門』 大木俊秀 家の光出版

『新川柳入門』 齊藤俊輔 葉文館出版



## 講師略歴………巽 俊一(たつみ しゅんいち)

1948年生まれ。立命館大学卒業。損害保険会社退職後川柳を始める。鯖江市在住。番傘本社同人 番傘ばんば川柳社同人。

## ■三月九日放送（第四十八回）

### 「子どもファースト」の福井に

福井県子ども応援ディレクター 武原 智美

#### ●子ども応援ディレクターの役割

福井県では、若手職員を管理職である課長相当の役職に登用し、プロジェクトに関連する分野について部局横断的に県政の重要課題解決に取り組むことができる独自の制度があります。この制度を活用し、令和6年度から「子ども応援ディレクター」として「子どもファーストの福井」の実現に向けて、親だけでなく、「子どもや若者の声を直接聞いて、現場の視点に立った子ども・子育て支援策を企画・実行することとなりました。



「子ども目線」で応援！」をコンセプトに、県内のさまざまな境遇の子ども・若者の意見発信・活動等への伴走支援を通じ、現場の視点に立った子ども・子育て応援施策を先導する司令塔として、子どもも親も幸せを実感できる「ふく育県」のさらなる強化に取り組んでいます。

#### ●福井県の子育て環境は？

福井県は、安定した雇用環境や教育環境の高さ等が総合的に評価され、令和6年まで6回連続で幸福度ランキング日本一（日本総合研究所調べ）を獲得しています。共働きの割合が全国1位、女性の就業率が全国2位など、日本一の共働き社会ですが、女性の仕事と子育ての両立を三世代同居・近居割合の高さが支えるとともに、全国トップクラスの学力・体力を育む教育など、充実した子育て環境が整っています。

令和4年2月には、日本一幸福な子育て県「ふく育県」を宣言し、全国でも類を見ない大胆な子育て応援のさらなる強化に取り組んでまいりました。併せて、テレビCMやSNS等により県内外への発信を続けることにより、「ふく育県」の認知度は着実に高まりつつあり、令和5年2月に本県で開催された全国初の「子ども政策対話」でも、当時の岸田首相から、「国がこれから目指すべきモデルケースである」と高く評価されました。

このような福井県の充実した子育て環境を、県民のみなさまに実感していただきたい。そして次世代を担う子どもたちにも、自分たちの将来をイメージしていただき、意見を聴きながら、一緒に住みよいまちをつくっていききたいと思っています。

#### ●子どもたちの声をまちづくり

さらに、「子どもたちの意見を発信する仕組みをつくるた

め、令和6年度に「こどもファースト意見発信事業」を実施しました。公募によって集まった高校生を中心としたこどもたちと一緒に、「福井県がよりよくなるために、こんなことをしてみたい」という声を県の政策やまちづくりに反映させるべく、アイデアを形にするために取り組んでいます。

まず、こどもの居場所をテーマに活動してきました。メンバーのみんなで、自分たちが安心できると思う居場所を話し合い、実際にある居場所について考え、夏休みを利用して、県内の子ども食堂やユースセンターなど、こどもの居場所に行ってみて居場所を体験してみました。みんなで話し合っただけで感じたことは、居場所は、人によって心地良くて安心できると思える場所が違うということです。さまざまな居場所を選択することも必要なことなのだと知りました。これからは、居場所以外にもメンバーのやってみてほしいことを募ったりして、活動の幅を広げていきたいと思っています。

こどもたちがいきいきと暮らすことができるよう、まちづくりにもこどもの視点や意見を取り入れ、「こどもファースト」なまちづくりを進めてまいります。

### ●こどもたちの未来を応援したい

私自身、4人の子を持つ母として、子育ての大変さや喜び、愛おしさを感じながら過ごしています。生きていれば、つらいことも悲しいこともありますが、こどもたちが笑顔

でいることで親や周りの大人も笑顔になり、ひいては、親や大人が笑顔でいることで、こどもたちが笑顔でいられる。そんな笑顔の輪が循環していくと素敵だなと思います。これからの未来を共につくっていくこどもたち自身が人生を歩む中で、明るい未来を想像しながら、まちづくりに関わることで、生まれ育ってきた地域に愛着を感じ、笑顔で過ごせる未来をつくっていきけるよう応援してまいります。



ふくいわくわくmakersと知事との意見交換



こども・若者とのワークショップ

### 講師略歴……武原 智美（たけはら ともみ）

福井県永平寺町（旧松岡町）出身。鹿児島県の離島（沖永良部島）で町役場職員として働きながら、こども食堂・学習支援の代表として地域のこどもたちや子育て世代との触れ合いや対話を重ねる。令和4年度にウタターン帰省し福井県庁に入庁。子育て支援・児童福祉業務に従事し、令和6年4月にこども応援アドバイザーに就任。

## ■三月十六日放送 (第四十九回)

### 人と、地域と、能作

株式会社能作 代表取締役会長 能作 克治

わが社は、鋳物のまちとして400年以上の歴史をもつ富山県高岡で1916年に創業した鋳物メーカーで、今年で創業から109年となります。創業以来、国の伝統的工芸品に指定される「高岡銅器」の職人技術を継承し、伝統産業特有の分業制のもと、真鍮製の仏具や茶道具、花器などの生地を製造して問屋に納める、いわば下請け業者でした。

それが、2000年頃から自社ブランド「能作」を立ち上げて製品開発を始め、材料を錫すずのみにこだわった「錫100%」の酒器や食器の製造販売を展開したことで、現在では、国内に18店舗、台湾に2店舗の直営店を構えるよう



になりました。職人の手仕事で一つひとつ仕上げた製品を、自社の直営店で紹介したり販売したりすることを介して、高岡の伝統産業を世界に伝え、次世代へ繋いでいくという想いでやっ

ています。昨年には、福井県の大本山永平寺の門前に直営店をオープンしました。永平寺とは、長年、仏具の修繕などに携わっており、また、私が福井県坂井郡三国町（現坂井市三国町）出身であることから、永平寺店のオープンは喜びもひとしおでした。

わが社の工場は、緑の田畑が広がり、春には残雪の山景色が清々しい姿を見せてくれる、そんな自然豊かな地域にあります。北陸新幹線の駅である新高岡駅からタクシーで3000円ほどかかるこの場所まで、私たちの鋳物づくりを見学しようと国内外から年間13万人の観光客がいらっしやいます。

工場見学の受け入れは30年以上続けていますが、2017年の社屋移転をきっかけに、工場見学を観光資源として活用する産業観光事業に力を入れています。ものづくりの背景にある職人の想いや、地域産業の歴史・文化を五感で楽しんでもらいたいという考えから「もの・こと・ころ」をテーマにし、富山県の観光のハブとなるような施設づくりを目指しました。工場見学はガラス越しの自由見学ではなく、職人の目の前を通る動線にして、専任スタッフが説明しながら案内します。また、職人と同じ製法でぐい呑みなどの鋳物づくりを体験する体験工房、錫の食器を使って料理やスイーツを提供するカフェを運営しています。かつては地方の下請けだった工場に、今では毎年大勢のお客様がお越しになり、鋳物職人の門を叩いてくれる若者も増えていきます。しかし、私が入社した1980年代半ば

は、時代の流れとともに生活道具としての鋳物の需要が減り始めた頃でした。バブル時代真っ只中で、担い手不足と職人の高齢化などといった産地の問題は深刻化しつつあり、鋳造業は「3K」と呼ばれていました。そんななか、私が鋳物職人として従事していた当時、地元の子が見学をしたいと訪ねてきました。工場内で彼らに鋳物づくりを見せると、その親は子どもに「勉強しないとこんな仕事をすることになるよ」という言葉を放ちました。高岡という地域で400年間続いてきた歴史のある伝統産業を地元の方が誇りに思わない姿に、私はショックを受けました。

この出来事を機に私は、「鋳物職人の地位を取り戻す。地元の方が地域の伝統産業を大切に思い、子どもたちが自分のふるさとを誇れるようにする」と決意し、子どもたちの工場見学を積極的に受け入れるようになりました。伝統産業への偏見を払拭するためには、私たち職人の技術を実際に見てもらうことが重要だと考えたのです。そしてこれが現在の産業観光事業へと繋がっていったことで、富山の観光スポットとして、地域の方だけでなく、国内外から評価してもらえるようになりました。

わが社は2023年から「人と、地域と、能作」というタグラインを掲げています。この言葉には、私たちの製品やサービスを介してお客様や地域の方に喜んでもらい、地方創生や日本の未来づくりに尽力したいという思いを込めています。

地域の伝統産業「高岡銅器」を根源に、創業以来、高岡

で培われてきた職人技術に誇りをもち、今日まで受け継いできました。「人」と「地域」に支えられ、今の私たちがありますので、感謝の心を忘れずに、この伝統と想いを100年先へ繋いでいきます。



©車田保

#### 講師略歴……能作克治（のうさくかつじ）

1958年、福井県坂井郡三国町（現坂井市三国町）生まれ。大阪芸術大学芸術学部写真学科卒業。大手新聞社のカメラマンを経て、84年に能作入社。18年間職人として働く。2002年、代表取締役社長に就任し、自社ブランドの展開を開始。03年、世界初の「錫100%」のテーブルウェアの製造販売を開始。16年、藍綬褒章を受章。23年、ダイヤモンド経営者倶楽部22年度「マネジメント・オブ・ザ・イヤー」大賞受賞。23年、株式会社能作代表取締役会長に就任。24年、世界初の錫ジュエリー専門ブランド「NS by NOUSAKU」の展開を開始。

■三月二十三日放送(第五十回)

まちの課題を学生の発想で考える

関西大学環境都市工学部 教授 北 詰 恵 一

○関西大学環境都市工学部と大野市の関わり

大野市は400年以上前に築城された越前大野城を中心に城下町として発展してきましたが、近年は過疎化と高齢化が課題となっています。市は以前より、街の活性化策として地下水に関連した様々な事業を展開していました。関西大学は2017年、市の協力要請を受け、地下水を含めた総合的な市の活性化策の検討を、環境都市工学部建築学科と都市システム工学科の4人の教員で始めました。

主な活動内容としては

- 1 大野盆地の地下水の性状および賦存量
- 2 過疎化対策の一環としての空き家リノベーション
- 3 地域住民と本学学生の協働による拠点造りと運営



- 4 アンケート調査に基づいた地域住民のまちづくり機運の醸成を目的としたイベントの企画・実施
  - 5 学生目線による大野市の魅力発掘活動
- があり、翌2018年には、大野市と関西大学は「包括連携協定」を締結しました。教育、文化、人材育成、福祉、地域産業、学術研究など各分野で協力するという内容となっています。

○地域再編のための拠点「横町スタジオ」

定期的に学生が関わるようになった中で必要とされたのが、学生と地域住民が交流するための拠点施設でした。2017年に大野市で空き家調査を実施していたことから、空き家となっていたふとん店を、地域拠点「横町スタジオ」としてリノベーションしました。

このスタジオでは、地域住民が参加できるように「お茶会」など様々なイベントを開き、住民も多く集まってくれました。大野に通い始めた学生たちが実感したことは、大野に寄り添って住まう大野人の優しさと強さです。その知恵と経験に耳を傾ける拠点として、スタジオを活用しました。空き家活用の事例となり、地元大学の学生・民間企業・大野市との協働も実現できました。

○関わり続ける定住のカタチ

当初から活動に携わってきた学生の一人は、大野市へ移

住し、地域おこし協力隊員として、空き家情報の発信や空き家を活用したワークショップを開くなどの活動を住民協力のもと実施しています。

また、大学に働きかけ、大野市への本学学生の「短期留学」を始めました。留学先というと海外を思い浮かべる方が多いと思いますが、横町スタジオを拠点に毎年学生たちが大野を訪れ、原風景とそれに基づくと風土に根ざした暮らしを経験しながら、地元の大学や企業が授業を受け持つというプログラムを構築しました。大学の授業として単位も取得できます。学生たちが滞在できるように、横町スタジオも男女別の部屋を設けるなど改修しました。宿泊を伴う実習は学生にとって負担も大きいとは思いますが、およそ8人が受講して大野市でさまざまな経験ができたと思っています。この経験には、大阪で過ごす学生が、大野市という地方部に対して漠然と持つ自然の豊かさや食べ物のおいしさといった感想だけではなく、自然と向き合う厳しさや暮らしていくにあたっての苦労など、市民の方々と直接触れ合うことで気づく大切な思いも含まれています。だから「実習授業」としての意義も深まりました。ただ、この単位を認定する実習も手段であり、大学が地域に関わり続けることが目的です。大野市にとっても、学生が地域に関わり続けられる環境を構築することは、卒業後の関係人口創出という点でも成果が期待されます。

## 〇まとめ

地域と人との関わりは多様で複雑です。人口という単純な指標で見えてしまうと、たくさんの方が定住しなければいけないという固まった考えしか浮かばず、無理な対策を進めてしまいがちです。しかし、そこに住んでいなくても、何かあれば駆けつけてくれる人がいること、大切な経験を記憶に留めて思い続けてくれる人がいることなど、色々な関わり方を持つてくれる人を増やすことも大切です。もちろん、学生が、継続的に地域と関わり続けることは根気が必要となりますが、その記憶が、将来、人生の節目に帰ってきたくなる場所として刻まれると考えています。そのような優しくも厳しい場所こそ21世紀に必要な故郷ではないでしょうか。これからも持続可能な地域課題の解決のモデルとして、市民の方々と学生たちとともに歩み続けたいと思います。

## 講師略歴……北詰 恵一(きたづめ けいいち)

1965年神戸市生まれ。東京大学大学院を修了後、(株)野村総合研究所に勤務。東北大学を経て、現在、関西大学教授。まちづくりを手掛ける大学内組織の地域再生センターのセンター長。市民とともにまちづくりを進める取り組みを続けてきた。産官学民の連携が必要だと考え、自治体と市民の協働だけでなく、企業と市民による共創、そして、学生が関わるまちづくりに取り組んでいる。

## ■三月三十日放送（第五十一回）

### ボルガライス全国区への道

日本ボルガラー協会 会長 波多野 翼

福井県越前市のご当地グルメ「ボルガライス」は、オムライスの上にカツをのせ、デミグラスソースやトマトソースなどお店ごとの独自のソースをかけたボリューム満点の一品です。そのユニークな味わいや見た目から地元では長く親しまれてきましたが、2010年3月に「日本ボルガラー協会」が設立されるまでは、市内でボルガライスを提供する店舗はわずか5店舗。地元の一部の人々だけがその存在を知る隠れた名物でした。

転機となったのは2009年12月に日本経済新聞に掲載された「もったいない福井人気質」という記事です。この中で、福井県が持つ魅力的な観光資源やおいしい料理が十分にPRされていない例として

ボルガライスを取り上げられました。この指摘を受け、2010年3月23日に越前市の職員だった私たちがプライベートで「日本ボルガラー協会」を結成し、



地元グルメを全国に発信する活動を始めました。

協会の初期目標は「ボルガライスを学校給食に導入すること」でした。資金が限られる中、無料のウェブサイトを作成し、宣伝動画をYouTubeで公開するなど、コストをかけずに認知度を上げる方法を模索しました。また、SNSを駆使して情報発信を行い、地元出身の有名な劇作家・池上遼一氏に協力を依頼。彼がデザインしたポスターを制作するために地元の商店や個人から協力を募り、完成したポスターは市内の多くの店舗や施設に掲示され、目にした市民や観光客、さらにメディアから注目を集めました。この活動を通じて、地元での認知度が向上し、「越前市」といえば「ボルガライス」というイメージが少しずつ形成されていきました。

2012年には目標の一つであった学校給食への導入が実現し、地元の子どもたちにとってボルガライスは身近な存在となりました。



ランチパック

同時期に、オタフクソースから「ボルガライス専用ソース」が発売されるなど商品化が進み、さらには山崎製パンとのコラボで「ランチパック」が「ボルガライス風」が北陸・東海地方で期間限定販売されるなど、全国的に注目されるきっかけが生まれました。

これにより、ボルガライスの知名度は急速に広がり、観光客が越前市を訪れる理由の一つとなりました。

さらに、JALの国際線機内食にボルガライスが採用され、越前市外や海外にもその存在が知られるようになりました。地域の伝統工芸である越前焼の組合も協力し、ボルガライス専用の皿を制作。この皿は料理を引き立てるだけでなく、越前市の文化や工芸をアピールするアイコンとしても活用されています。

2022年には、文化庁が進める「100年フード」にも認定され、地域の歴史的な食文化として評価を受けることになりました。この認定は、地元住民にとって自分たちの文化への誇りを再認識する機会となり、観光客にとっても魅力的な食文化が形成されました。ボルガライスの価値がさらに広がりを見せたのです。

現在、越前市内でボルガライスを提供する店舗は20店舗を超え、市外にも広がっています。さらには海外でも提供されており、タイのバンコクや中国・江蘇省無錫市の飲食店でも楽しむことができます。昨年3月に北陸新幹線が福井県内で開業したことも後押しとなり、越前市を訪れる観光客の中にはボルガライスを目



タイバンコクの飲食店

当てに訪れる人も増加しています。

日本ボルガラー協会の活動は、地域資源を活用して地元を全国に発信する成功モデルとして注目され、講演依頼が全国から寄せられるまでになりました。これからも、越前市の魅力を伝える象徴として、ボルガライスのPR活動を続けていく予定で、この取り組みがさらなる地域活性化の一助となることを目指しています。



講演の様子

#### 講師略歴……波多野 翼（はたの つばさ）

1984年越前市生まれ。2007年仁愛大学卒業、2009年越前市役所入庁。越前市のご当地グルメ「ボルガライス」のPR活動を多くの市民を巻き込んで展開し、ボルガライスを全国区に。仕事でも困窮世帯の早期発見のための「わかちあいプロジェクト」やVチューバーを活用した情報発信などの新規事業を手掛ける。子育て講座の講師やベストセラー絵本作家としても活躍し、現在、衆議院議員となる。ふくいひとの力大賞2013、地方公務員が「本当にすごい」と思う公務員アワード2019、FUKUI SDGsアワード2020など受賞。

# 感想文のコーナー

このコーナーは、受講生の皆様から寄せられた感想文を紹介いたします。紙面の都合上、すべての感想文を紹介できないことをご容赦ください。

■一月五日放送(第三十九回)

診療所の外に飛び出していく地域に開かれた医療

新野 保路 先生の感想文より

▼山田 寿美(七十二番)

診療所の医師が地域に出かけて行き、患者を診察し、勇気づけている内容のテレビ番組を観たことを思い出した。その時、自分一人では容体が悪くても出かけられない高齢者はどんなに嬉しいだろうと思った。

今回の講座は、「医療を含めた生活全体を健康にし、病める人も健康な人も一緒に暮らし、全体で高めていく」こと。そのためには、家庭医であり総合医でもある医師が、何でも相談にのり、対等に楽しい関係を保ちながら、まちづくりに貢献しよう」という内容だと理解した。

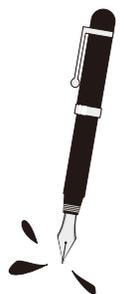
私は現在、整形外科と脳神経内科を定期的に受診しているが、自分一人で行けなくなったら「どうしよう」と不安な気持ちで一杯だ。もし、この南越前町のようなシステムがあったら、住民は安心して暮らせるだろうなあと思っている。今後は医療に対する考え方も変わっていくだろう。どうしたらみんなが安心して暮らせるまちになるか、ぜひ

そんなまちになってほしいと切に願っている。

▼藤沢 静子(百六十四番)

南越前町今庄は昨年に町中をウォーキングしました。今庄宿は建物などから昔の生活様式がうかがえて、どこか懐かしさを感じました。裏通りにはたくさんのお店があり、道路の狭さや市街地までの遠さと思うと、冬の豪雪時には、どのように生活しておられるのかと思ったりもしました。

そんな地域だからこそ、先生のような家庭医が必要なのでしょう。昔は先生のような「その人の専門医」が多かったように思います。私は月に一度はクリニックにいきますが、長時間待つて数分での診療が当たり前になっています。昨今、過疎化や人口減少が課題だと言われていますが、住民の意識が変わってきているようにも感じました。地域に開かれた医療を目指し、地域に自ら関わり、寄り添いの精神での診療や活動をされる先生の思いに感動しました。町並みやゲストハウスを今年も散策してみたいと思います。



## ■一月十二日放送 (第四十回)

## フェイクメディアにご用心

馬場口 登 先生の感想文より

## ▼大下 敏雄 (二百二十九番)

今日の先生のお話を聞いて、本当に怖い世の中になったと思った。コンピュータが誕生したのは1947年だという。私が生まれる2年前に人間の能力をはるかに超えた計算能力をもつコンピュータが誕生し、「便利なもの」としての文明の利器が一転して人類の脅威となった。現代のフェイクメディアはまさに脅威の産物であると思う。

Aーという言葉は最近のものかと思っていたが、誕生してから70年の年月が経っているという。私がインベーダーゲームやテレビゲームに慣れ親しんでいた時代は、それなりに良かった時代だった。また、コンピュータと棋士が対決するニュースを見たりして、「すごいなあ」とも思っていた。しかし、人間の欲望の無限さは留まることを知らない。その上、またその上と日々進化し、簡単に人を騙す道具として悪用されている。

フェイクニュースが本物のように、選挙、戦争などに使われ、何が本当なのか偽物なのかわからなくなると、何を信用したらよいか……。本当に怖い世の中になった。

どこかで規制をしないと取り返しのつかない事態になる。「核のボタン」も危機に曝される世の中になりかねない。

## ▼竹内 多美子 (四十番)

最近、社会倫理をわきまえない、不真面目な事件がまかり通っていて腹立たしく思います。詐欺にしても巧妙な手口で騙してくるのですから、善良な市民はついつい引っかかってしまいます。

どうして偽情報、偽広告、フェイクニュースやデマが蔓延ってしまったのでしょうか。先生はそれらを「フェイクメディア」と呼んで、詳しい解説をしてくださり、人工知能(Aー)が大きく関与しているとまとめられました。

Aーの研究が進んで、人間の知能を上回る人工知能が開発され、人間社会で効率的に働きかけ、成果は上がっているものの、科学の力を悪用して社会を脅かし、さらには社会の倫理を逸脱し混乱に陥れています。

そういう事件には厳しく立ち向かわなくてはなりません。しかし現状は「だますAー」に比べて、「見抜くAー」が充実していないため、検査が後手くになってしまっているとか、残念でなりません。私ができる対策は詐欺に騙されないように気をつけることしかありません。世の中平穩に暮らしていきたいものです。

■一月十九日放送 (第四十一回)

シフォンケーキにできること

「路上の青年たちに就学と就業の機会を提供する田舎のカフェの試み」

渡邊 洋 先生の感想文より

▼前川 嘉津子 (二百十八番)

路上生活をしている子どもたちの話はとても身につまされます。クラウドファンディングによって製造器具などを揃えること、質の良い材料を取り寄せることなど、「苦労がいつぱいあったと思います。品質の高いケーキ作りはフィリピンの子どもたちが生きていくためのソーシャルビジネスになると先生は説かれました。そして、夢のあるおいしいものを食べることで人は優しくなれるとも。うれしい物作りに思えてきました。惜しみなく、作り方を伝授される先生の懐の深さ、熱心に作り方を学習する子どもたち、これからも今以上に広まることを願っております。

私は以前古民家でフワフワのシフォンケーキと自家焙煎コーヒーを味わったことがあります。とてもおいしかったです。高級感のあるシフォンケーキ作りは路上生活から、きつと抜け出せると思っています。私もシフォンケーキ作り教室に一度行きたいと思いました。

▼福岡 隆夫 (二百二十八番)

NGPP団体とNPO団体の理解から今回は勉強し、改めてシフォンケーキなるものを認識した。

先生は本業とは別にケーキ作りを学び、さらに「国際開発学」を受講された。そのバイタリティに感服する。また、シフォンケーキ作りと販売方法をフィリピンの路上青年たちに教える機会を逃さずに協力者を集めて実行、実現させる奮戦努力に頭が下がる。

一つのことを実現させるためには、本当にさまざまな準備、検討、対策など多くの課題があることを知った。特に今回の場合は、彼の地で彼らに自信を持たせることもできた。

そして先生は「過去の信頼蓄積に伴う試練への支援が生まれた。その先に更なる信頼が得られる」との確信を得られた。私は支援には彼等の歩みに合わせて伴奏することが大切だと教わった。

■一月二十六日放送 (第四十二回)

あなたは肉を買う時、どこで、なにを、どのように選びますか？

中野 直幸 先生の感想文より

▼齋藤 優 (二百二十一番)

食肉一筋に仕事を続けておられる先生の奥深い研究とお

おいしい牛肉の普及と販売に日々励まれている姿に敬服しました。近年は肉類が専門店やスーパーの他、ドラッグストアでも販売されています。

肉牛の育て方や管理の方法についても、おいしい牛肉は県内産の「若狭牛」をはじめ、国内牛は各産地で工夫をこらしていて繁殖と肥育をして出荷していることが分かりました。先生の店で販売されている牛肉は、坂井市で肥育期間を特別に長くして育った雌牛とのこと。ここで育った肉牛は主食の稲わらに「ロシヒカリ」や「ハナエチゼン」を混ぜて育てられていることを聞いて驚きました。随分栄養豊富な肉牛が育っていると思いました。

育牛のに関係する業者が協働して安全安心して牛肉を食べることができるのも肉牛の体調管理が十分に行き届いているおかげだと思います。

▼杉下 信夫 (八十八番)

若狭牛は、若狭地域で飼育したものだと思っていましたが、そうでもなかったようです。最近では、海産物より畜産品のほうが多く消費されて、逆転しているとのこと、意外でした。

我が家では、毎日、魚類は欠かしません、肉はたまに近くのスーパーで豚バラを買う程度です。いずれにせよ、命をいただいているのですから、感謝しながらおいしく味わっています。

文芸欄

俳句

遠き日の師の眼差しや木の芽風  
紅梅や赤子大の字にて眠る

前川 康子 (二十四番)

血縁とは胤糸ほどの絆かな  
憂鬱の隅に集まる春埃

高石まゆみ (百六十五番)

クロッカス風の硬さに直立す  
世界中傷だらけでも春は来る

中山 慶子 (二百六番)

川柳

膿を出しセクハラテレビすつきり  
新年に早から中居あきのかぜ

前川嘉津子 (二百十八番)



ラジオ講座「いきいきライフ」公開講座

# 世代を超えた コミュニケーションを 取るために

～伝説のお笑い講師による  
“コミュニケーション講座”～

吉本興業お笑い養成所NSCで、中川家、麒麟、かまいたち、  
ナインティナインなど30年間で1万人のお笑い芸人を指導して  
きたお笑い講師である本多氏から、お笑いのスキルを暮らしに  
活かすコミュニケーション術を学びます。

## 2025.3.18

開場▶14:00 講演▶14:15～15:45

**TRETAS** **トレタスグリーンホール**  
TRETAS GREEN HALL (福井市高柳2丁目1206)

**参加費無料**

**定員100名**

### ■申込方法

下記に、必要事項をご記入の上、2025年3月11日  
(火)までに、郵送、FAX、Eメール等にて、下記事務局  
までお申し込みください。  
なお、受講決定通知は送付しません。締切日までに  
定員に達した場合、受付にもれた方のみ、ご連絡  
を差し上げます。



こちらのフォームからも  
お申し込みいただけます。



©YOSHIMOTO KOGYO CO. LTD.

漫才作家・よしもとNSC講師  
ほんだ まさのり  
**本多 正識 氏**

### 講師プロフィール

- 1958年 大阪府高槻市生まれ
- 1979年 ラジオ大阪「Wヤングの素人漫才道場」コーナーで漫才台本が11本連続採用され漫才作家を志す
- 1983年 漫才作家集団「笑の会」に参加
- 1984年 オール阪神・巨人の台本執筆等、漫才師や吉本新喜劇に台本提供
- 1990年 NSC講師に就任、「M-1グランプリ」「キングオブコント」審査員
- 1991年 読売テレビ「上方お笑い大賞・秋田賞賞」受賞
- 2017年 NHK連続テレビ小説「わろてんか」脚本協力、漫才指導で参加
- 2021年 NHK「プロフェッショナル仕事の流儀」に出演
- 2022年 NHK「アナザーストーリーズ運命の分岐点」に出演



ふりがな 氏 名		年齢	歳
電話番号			
住 所	〒		

※ご記入いただいた個人情報は、講座の運営および関連講座等のご案内以外には使用いたしません。

【問合せ・申込先】  
社会福祉法人 福井県社会福祉協議会  
**福井県すこやか長寿センター**

〒910-8516 福井市光陽2-3-22  
TEL:0776-24-2433 FAX:0776-24-0041  
Eメール:sukoyaka@f-shakyo.or.jp